研究

矢嶋作郎伝

上野国秋元館林藩の奮闘

会員　伊藤健

「電気事業の父」矢嶋作郎プロフィール

天保十年（一八三九）、周南市上御弓丁に徳山藩士伊藤三郎治亮宣の二男として生まれる。作郎が過ごした幕末は毛利元蕃公の家臣として活躍、本名の伊藤湊として生きた時代である。長州征伐の際、江戸に幽囚されるも、徳山藩の親戚藩、秋元館林藩に保護され、後、解放される。

解放後、四境戦争にも結草団総監として阿武郡奈古、大井両村防御の為、同村農町民を率い出兵する。

明治になり、毛利元功公の英国留学に従者として随行、その折、矢嶋作郎と改名した。そのころ明治政府は、ドイツのフランクフルトで日本の紙幣を印刷する準備を進めていた。その監督に留学生代表として活躍していた作郎が命じられたのである。ドイツに渡った作郎は、日本最初の紙幣の印刷に携わるかたわら欧州各国を訪れ、政治、経済、社会の現状をつぶさに視察。明治七年（一八七四）、欧州から帰国し大蔵省紙幣助に就任した。現在の紙幣、及び切手製造の礎をなし従六位を叙せられる。

その後、官を辞し、実業家に転身、日本の街に初めて電気の明かりを灯した東京電燈を設立。「日本のエジソン」藤岡市助を技師長に迎える。我が国の電気事業の創始者であり、藤岡市助を育て、まさに日本の歴史に残る大事業を興したのである。その他、障害者の支援、英語の普及、草創期の各種事業への参画、各種方面に多額の寄付、また、香川桂園の門下であった作郎は、和歌の会、明月會を設立、中山三屋女や桜井魁園らの歌集を編纂、和歌の世界でも活躍した。明治四十四年（一九一一）十一月七日卒。享年七十三歳。港区南麻布　光林寺に眠る。光國院覺心桂城大居士。両親は徳山大成寺墓地に眠る。

プロローグ

伊藤湊が矢嶋作郎と改名してからはいろいろな史料が残されているが、伊藤湊の史料はほとんど知られていない。伊藤湊はどんな人物だったのであろうか、いったいどこで何をしていたのであろうか。江戸時代から今もかわらず存在する上御弓丁で、紛れもなく生れ、育った伊藤湊。この御弓丁の道を、髷（まげ）を結い、刀を差し、闊歩していたのであろう。知りたい。矢嶋作郎の青春時代を。

「伊藤湊探し」の歴史の旅が始まった。

伊藤湊の幕末

山口県文書館にて、いつものように資料をあさっていたら、文書館の吉積先生が数冊の文献を差し出して下さった。『忠正公傳』であった。果して。

第十六編　第六章　徳山藩紛擾（ふんじょう）の鎮静

幕末、元治元年（一八六四）八月九日、家老富山源次郎襲撃事件を発端に、衝撃の事件に発展した「徳山殉難七士」の詳細が記されていた。読み進んでいくと、俗論（保守）派により、正義（革新）派の粛清が行われることに対し、正義派の起こした様々な事件のひとつである「仏像破壊」という文字が飛び込んできた。なんと、その張本人が伊藤湊であった。そして、それを裏付けるように、徳山市史史料の浅見政一氏所蔵『有志詰問録』に、伊藤湊等により仏像破壊等が行われたことが、井上唯一、庄

原登美衛、岩崎謙同等によって証言されている。

そして、襲撃事件等にかかわった七名が元治元年（一八六四）八月から翌年一月にかけて殺害された。所謂（いわゆる）「徳山殉難七士」である。その七名のうち実に、本城清ら四名が湊の親族であった。湊は幸いにも殺害から免れたのである。「忠正公傳」の取調録の最後に「伊藤湊は江戸に居て不在」と記されていた。そうか！徳山にいなかったから殺されなくて済んだのか。では何故、江戸へ？

藩命により江戸へ

文久三年（一八六三）、八月十八日の政変が起こる。別名、堺町御門の変である。松平容保（かたもり）は中川宮、九条、二条、近衛らの佐幕派の公卿達と謀り、長州藩による堺町御門警衛を解いた。徳山藩を含む長州藩は、討幕派の七卿を伴い長州へ落ち延びることとなった。時勢は佐幕派台頭へと移っていく。

そして翌年の徳山藩。藩命が下った。それは私に、新しい歴史への道を教えてくれた兼崎茂樹編の『徳山名士墳墓掃苔録（ふんぼそうたい）』に記されていた。

「元治元年六月五日、正使林麓、副使遠藤貞一、伊藤湊等、江戸へ往き冤罪を訴える。堺町御門警衛復旧の件、並びに、君公入京の件に関してなり。」

佐幕派により粛清が行われようとしていた頃、江戸へ向かう湊、時代の波に呑まれて行く。

元治元年七月十九日、蛤御門の変（禁門の変）勃発。第一次長州征伐へと突き進む中、徳山藩邸没収、江戸在府の伊藤湊ら徳山藩家臣は幽囚となり、大きな渦に巻き込まれてしまう。再び『忠正公傳』より

「毛利淡路守屋敷を召し上げられ候につき、屋敷内に罷り居る家来並びに家族一同を引き取る」旨の書状の最後に「秋元但馬守、関民部大輔、板倉主計頭」とある。この連名の三名は一体誰なのか。

秋元但馬守は秋元館林藩初代藩主秋元志朝（ゆきとも）公であった。驚いたことに時の徳山藩九代藩主毛利元蕃公の実の弟である。関民部大輔は新見藩主、板倉主計頭は安中藩主であり、ともに徳山藩の親戚関係にあった。

それから足掛け三年、慶応二年（一八六六）のことである。

「慶応二年丙寅六月十一日一昨年変動之節江戸屋敷詰合之もの共幕府江被召捕、御親類秋元板倉関之三侯江御預ヶ相成居候処、此度御宥免相成被差返ニ付五月八日江戸出帆海上芸州広島江着、左候而広島ゟ岩国江引渡相成ニ付一昨日九日大野太郎兵衛義惣人数為請取岩国江被差越今日召連帰着、何れも無事之内足軽三人於江戸病死、惣人数上下合三拾四人内侍分九人如左　林麓　遠藤貞一吉田志津馬　同市治郎　浅海浪衛門　同他熊　伊藤湊小倉孫右衛門　石田又五郎」と『徳山藩史』にある。

伊藤湊は解放されたのである。同事件に於いて萩本藩（ほんぱん）では百二十人拘禁され、半数に近い五十人以上が亡くなっているのに対し、徳山藩では三人病死しただけで三十四人が無事生還している。これはひとえに親戚藩三藩、特に責任藩とされた館林藩の厚い保護のおかげであろう。

この事実を知った私は、何としてでも館林に行きたい。館林に行けばもっと歴史が明かされるかもしれない。そして、館林市教育委員会文化振興課に電話をした。

真夏の熱〜い館林

平成二十五年八月十三日、群馬県館林市立図書館の一室で私は黙々と史料を探し続けた。「伊藤湊探し」の歴史の旅である。ところが、予想もしていなかったもっと、もっと熱い歴史を知ることとなった。

同年六月、最初に私の電話を取られたのは、阿部弥生学芸員であった。実に親切に対応していただき、私の相談に快くのって下さった。そして、阿部学芸員の上司である岡屋英治課長が、私の問いかけの調査に動いて下さり、ついに館林へ行くことに。館林では図書館の一室を設けて下さり、冒頭の史料探しとなったのである。

確かに見つけた。『館林事蹟考』という一冊の本の中に、

「九月徳山侯宗家ノ事ニ連座シテ、官位ヲ削ラレ江戸ノ邸宅ヲ奪ハル旨ヲ弊藩及安中新見ノ三藩ヘ幕命アリ。且在府ノ臣下ヲ分テ三藩ニ幽囚セシム。毛利氏ノ姻戚ヲ以テナリ。以上ノ旨ヲ徳山ヘ可達ノ旨アリ。使節二名、普

賢寺武平基行、勝沼精之允信紀、ヲ周防徳山ニ遣ル　二藩ノ命ヲ兼。十一月徳山ニ至ル。毛利淡路謹ミテ命ヲ受ルニ調印ノ請書ヲ以テス。旬日両使復命ス。後丙寅五月ニ至リ、幕幽囚ノ輩ヲ周防エ放タル。船路芸州エ送ルベシト弊藩ニ於テハ安館精相通称門造及卒三名ヲ以テ廣嶋エ護送シ、在芸ノ幕吏エ達シテ歸ル。時ニ老中松平伯州（秀宗）指揮使トシテ廣嶋ニアリ。」という文献である。伊藤湊が解放された時の様子が書かれた『徳山藩史』と同じ状況を館林藩から見た事蹟である。江戸在府の家臣を預かる旨の報告の為、徳山へ、また、解放された時は、広島まで護送、送り届けている。親戚藩なのである。私はこの親戚藩「館林藩」のことが気になり始めた。

尊王攘夷派志士岡谷繁實の奮闘

岡屋英治課長より秋元館林藩の家臣である「館林藩尊攘派志士岡谷繁實の生涯」（館林教育委員会・図書館編）という一冊の本をいただいた。衝撃的であった。

前記の江戸在府の徳山藩家臣幽囚の事件より、遡ると六ヶ月。元治元年（一八六四）一月十六日、長州征伐から主君志朝の実家、毛利徳山藩を救うべきだと、立ち上がった人がいる。館林藩士岡谷繁實である。長州藩は、前年の八月十八日の政変で政局の主導権を奪われ、さらに追い打ちをかけられようとしていた。繁實は長州周旋に命をかけたのである。京都に向かい、精力的に有力者に働きかけた。特に正親町三条には度々会い、館林藩二十人の志士が「今日一人死し、明日一人死し、全員死するまで」長州周旋の為に献身し、局面打開の為、努力すると言上して感激させている。

元治元年二月十三日、朝廷で参与会議が開かれ、長州問題が取り上げられた。この会議は一橋慶喜（一橋家）、松平春嶽（越前）、山内容堂（土佐）、伊達宗城（宇和島）、松平容保（会津）、島津久光（薩摩）ら雄藩の代表と、朝廷の近衛父子、正親町三条らの廷臣が二条城に集まり国政を議論する場であった。この日の会議は、凶暴なる長州を懲らしめるためには、征長（長州征伐）止む無しの意見が圧倒的であった。しかし、島津久光から、

最後の手段として、親戚藩である館林藩主秋元但馬守志朝に、委任してはどうかという提言があり、さらに正親町三条から、繁實の二十人死してもの決意が紹介され、会議はたちまち、但馬守一任と決定した。繁實の奔走と陳情が見事に功を奏したのである。

館林藩が幕末維新史上かくも存在感を全国に発揮したことはない。

日本の歴史の展開軸を握ったのである。館林藩最良の日である。

志朝、繁實主従は心労の日々を忘れて喜び合った。

しかし、喜びもつかの間、参与会議に一橋慶喜が欠席していたのである。将軍後見人の地位にあり、発言権は将軍以上であった慶喜は、後に公家から連絡を受け激怒した。「この件は、幕府扱いの問題である。朝廷が問題を処理されるというのか。幕府を差し置いて、各藩で処理するというのか。幕府は秋元藩に下命した覚えはない。」但馬守一任の参与会議の決定は敢え無く覆され、勅書も取り消された。しかし、繁實はあきらめなかった。今まで以上に宮家、公家、雄藩大名の京都屋敷を、連日連夜訪問奔走した。その甲斐あり、勅書は出されなくとも、骨肉の間柄としての周旋は容認することが各方面の上層部で了解された。結果、秋元志朝に親書が出され、長州へ使者を派遣せよとの達しがあった。繁實が召出され、志朝の代理で長州へ行く事になったのである。

元治元年（一八六四）三月二十日、総勢十一人、京都を出発した。長州では、志朝の父である徳山前藩主毛利広鎮、志朝の兄である現徳山藩主毛利元蕃、志朝の弟である萩本藩世子毛利定広（後の萩本藩主元徳）たちに会っている。しかし、周旋の根拠は親戚だからという単純な理由でしかなかった。館林六万石に対し、長州は支藩を合わせれば四十五万石、圧倒的な国力の差があり、長州を説得する力はなかった。また、会談の際の長州人の発言に、時局に対する認識の違いを感じ、思想力の違いを痛感するのである。

「条理に立ちたる御沙汰ならば徳山、長州、両国召し上げられ候とも謹んで承服仕る。」「たとえ朝廷、幕府の御

事たりとも、無理なる御沙汰にては、防長両国の士民鎮撫しがたし。」

このような藩に対して「お家の為に恐縮せよ」では説得は無理であった。

長州のその思想力が新しい時代を切り開いたのである。

周旋に失敗、処罰下る

元治元年（一八六四）六月、繁實は館林に帰郷する。大任を果たした繁實だが、藩の空気は冷たく、「長州気違い」と罵られる。

七月十九日蛤御門の変勃発。八月、幕府はついに第一次長州征伐令を発布。志朝、繁實主従の努力は実らず、十月、繁實に藩命による処罰が下った。家名断絶、家禄没収、永蟄居である。志朝は藩主を辞任される。いわゆる押し込め隠居である。最悪の事態になったのである。

遠く群馬の地から、家臣に気遣いながら、故郷徳山を想い、父や兄弟の為に尽くした藩主、秋元志朝。そして、ただひたすら主君の為に働いたその家臣、岡谷繁實。

館林にこのような藩があったこと、このような人たちがいたこと、そして、彼らを誇りに思い顕彰している館林の人たちがいること、私は館林において、ただ、頭を下げることしかできなかった。

（群馬県在住の工藤三壽男先生執筆の『・・岡谷繁實の生涯』から引用させていただきました。先生は群馬県立板倉高校長、同西邑楽高校長、その後、館林図書館長等を経て、執筆活動をされておられましたが、九月、永眠されました。合掌。元群馬県高校歴史研究部会会長。著書『図書館の窓から』『青春のいのち永遠に』その他）

山口に遺る館林の史料

長州周旋で心を痛めた館林藩主の文献『秋元志朝国事尽力始末』が、明治期、長州藩士児玉少介より毛利関係者に送られその後、山口市の文書館に履歴書とともに保存されている。他に館林藩断髪党の志士『大久保天弐斎之碑　拓本』、『館林郷土叢書 第四輯』。周南市立中央図書館に『館林双書　第9巻』『館林双書　第２３巻　館林

藩尊攘派志士岡谷繁實の生涯』『館林藩一番隊戦記』がある。徳山藩にとって忘れ得ぬ人々の記録である。

また、この度、館林教育委員会を訪問した際、『館林の大名と藩政　館林市史』『お国絵巻からみた家臣の道中記』を山口県文書館と周南市立中央図書館に寄贈して戴いた。

館林藩の歴史

今から約五五〇年前の戦国時代に館林城が築かれた。近世においては、徳川四天王の一人である榊原康政や五代将軍徳川綱吉などが城主となり、明治維新を迎えるまでの約二八〇年間、城下町として栄えてきた。館林を治めた七家は、いずれも親藩、譜代の大名として江戸幕府の要職につき、国替えによって何度も転封を繰り返したのが特徴のひとつである。

館林初代藩主は榊原康政である。榊原家から大給松平家、そして、歴代の館林藩主で最大の石高二十五万石を拝領した徳川綱吉へと移る。綱吉は四代将軍家綱の養子として江戸城へ入ったため、その子徳松が二歳で継いだが、五歳で早世、館林城は廃城となった。以後、越智松平家、太田家、井上家、そして、最後の館林藩主となる秋元家が入封した。

徳山藩九代藩主毛利元蕃の弟、秋元志朝は、実は山形藩主であった。井上家の浜松移封に伴い、館林に六万石で入封したのである。この山形から館林への御国替えの様子を、館林藩士山田喜太夫の妻音羽が、見事な挿図とともに道中日記「お国替絵巻」を書き残している。

現在の館林市

栃木、茨城、埼玉各県境にほど近い群馬県南東部に位置し、人口約七万九千人の城下町である。私は、訪れて驚いたのが町に山がないことであった。群馬県である。見渡す限り、空と町並みである。聞いてびっくり、市の平均標高は２０．３メートル、最高標高地は３３メートル、思わず桁が違うのではと聞き返した。北は渡良瀬川、南は利根川に挟まれた関東平野の最深部に近い所であった。

街には、館林城を築城する際、絶好の要害となった城

沼があり、夏には「花ハスまつり」が催され、遊覧船で涼しい夏景色を満喫できる。城沼は、今や市民の心を癒す館林の原風景となっている。また、武家屋敷があり、館林藩士の住宅や長屋門、土塀などが修復、復元され、通用門であった巨大な土橋門が、館林城を髣髴させる。

江戸時代からツツジの名所である。ツツジには身を投げた美しい側室の伝説が秘められ、樹齢８００年を超えるヤマツツジをはじめ、５０余品種一万株が咲き誇る。四月下旬からは大変な人出だそうである。

他に分福茶釜の茂林寺、館林出身者として、小説家の田山花袋記念文学館、アジア初の女性宇宙飛行士向井千秋記念こども科学館などがある。

館林に遺した徳山人の偉大な足跡

平成二十五年（二〇一三）八月十四日、館林市役所市史編纂センター岡屋紀子さんに古跡を案内していただいた。二日間、たった一人の為にこれ程までに親切にしていただける役所があるだろうか。恐縮の至りである。

〈旧秋元家別邸〉

和風建築の主屋と洋館の離れの調和が美しい明治時代後期に建てられた建物。離れ座敷の洋館は昭和初期、東京の本邸から移築されたものである。

〈秋元春朝の像〉

徳山毛利家十代当主毛

利元功公の三男の「投網の像」である。旧秋元家別邸の庭に設置されている。大正八年建立。

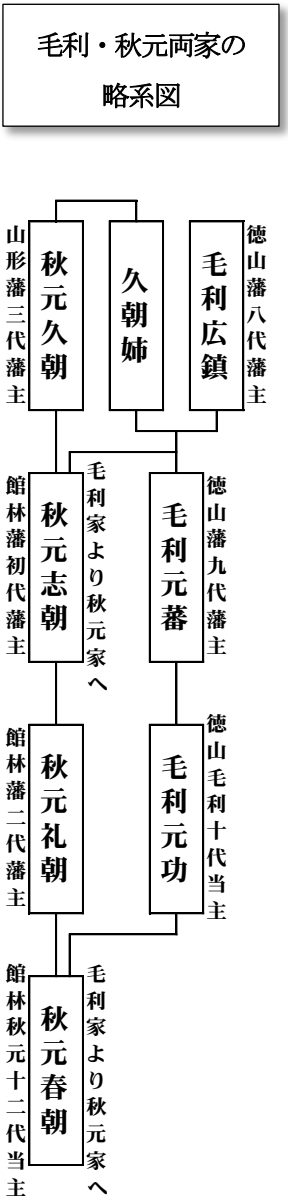
〈贈従三位秋元志朝の碑〉

土橋門のすぐそばにある4．2メートルもの巨大な石碑である。歴史研究家工藤三壽男は文化誌『歴・文』に「この碑を知らないで館林は城下町であったと自負できるだろうか」と著している。

志朝の業績は多く、雄略天皇陵の修復、藩財政の立て直し、農民の減税等、文武奨励し藩風刷新に努めた。篆額は弟の萩本藩最後の藩主毛利元徳である。

徳山人が遠い館林の地で光り輝いていた。

毛利・秋元両家の略系図



エピローグ

伊藤湊の旅を続けていたら、思いもよらぬ徳山藩の親戚にあたる館林藩の詳細を知ることができた。また、江戸幽囚については、伊藤湊自身の様子を探ることはできなかったが、徳山藩同様江戸に幽囚された清末藩士岡村静蔵が遺している幽囚記をみることができた。それによると、軍艦長崎丸で徳山藩士ともども広島に搬送された。四境戦争の最中であった。広島に陣取る幕府軍に死を覚悟したという。その後、広島から解放され幕府軍の太鼓や大砲が鳴り響く中、岩国に入った時はもうすぐ故郷だと、全員歓喜に沸いた。それより陸路、砥石浦にて船上、清末村に帰った。父の出迎えあり。父子共に手を握り只涙のみ、母は顔を見ると感極まり慟哭、妻は一言の言葉も発することが出来なかった。また、次々と尋ね来る友人たちに、この時ほど、家族の有り難さ、友の大切さを味わったことがないと述懐している。矢嶋作郎も同様であろう。生涯、「伊藤湊」のこの時代を矢嶋作郎は、きっと、忘れることが出来なかったことであろう。

最後になりましたが、岡屋英治文化振興課長・紀子ご夫妻、阿部学芸員、館林教育委員会、館林図書館の皆様に深く感謝申し上げます。いつの日か、徳山藩と館林藩のように、周南市と館林市が、心のかよう交流都市になることを夢見て擱筆（かくひつ）します。

ありがとうございました。

［参考文献］

館林藩尊攘派志士岡谷繁實の生涯
（館林教育委員会・館林市立図書館編　一九九五年刊）
館林市史　館林の大名と藩政
（館林市史編纂委員会　二〇一三年刊）
東京電燈株式会社開業五十年史
（東京電燈新田宗雄編　一九三六年刊）
歴・文（館林歴・文研究同好会　二〇〇七年刊）
徳山名士墳墓掃苔録（兼﨑茂樹編　一九一六年刊）
防長回天史（末松謙澄 著　一九二一年刊）
清末藩史話（徳見光三著　一九七一年刊）
徳山毛利家史料　忠正公傳　豊東村前史　館林藩事蹟考
徳山市史史料　近世防長諸家系図総覧　秋元志朝国事尽力始末　徳山藩史　阿武町史